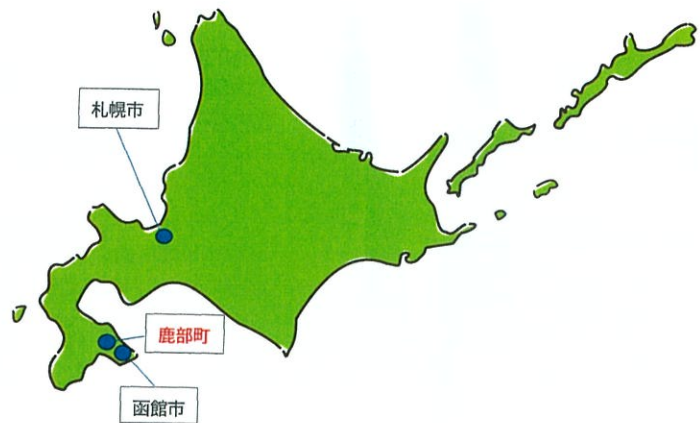


## 終わりになき図書館ジャーニー vol. 5

### 鹿部町 鹿部中央公民館図書室



運転できない者にとって鹿部(しかべ)町に向かうのは少々苦勞します。しかし南隣には道南で一番大きな函館市が。人口は2024年5月現在約3500人。

北海道新幹線の終点新函館北斗駅から鹿部町にバスで向かいました。道南は函館バスがほとんど。函館バスが発行する「िकास ニモカ」をはじめ、交通系ICカードがどこでも使用できるので、下車する際に小銭に焦る必要がないのがとてもありがたい。路線バスの車体によってはスマホの充電ができるコンセントなども設置され、本当に助かります。知らない町に行く時は、今どきどうしてもGoogleマップを使ってしまうのでバッテリー減るのも早い。

鹿部町は道南の内浦湾(噴火湾とも呼ぶ)の入口付近に位置します。対岸は室蘭です。水産業、特にたらこの町です。町の至る所から見える駒ヶ岳は見事！

いつものように図書室へ訪問する前に腹ごしらえ。ところが図書室周辺に食事処は全くなく、図書室を越え1キロ以上行ったところのバス停で地元民が集う食堂の前で下車。

お客には海の職人が多いようで、食べっぷりが半端じゃない。そして量も多い。酢豚ランチ、満腹でした。

お腹が満たされ図書室へ訪問。それほど広くないにも関わらずPOPが多い、新聞などの切り抜き掲示が多い、とにかく情報量がすごく詰まった図書室です。そして書架2本使って北海道日本ハムファイターズのエース伊藤大海投手のコーナーが。そう、彼の出身地です。活躍した新聞記事を全てスクラップにして閲覧できるようにしています。もちろん特集を組んでいる雑誌も揃えています。ご本人が公民館に訪問したらしい写真とサインも展示しています。

伊藤投手のコーナーの隣に郷土資料が並んでいる文脈は嫌いじゃないです。

『わが町を知ってもらうなら！北海道の図書館員が薦めるブックガイド』で、鹿部町は『柿の隣に実るもの』(発行:エネルギーフォーラム)という函館市出身の香名山はな氏が書いたエッセイを推薦しています。その推薦理由コメントに私は惹かれました。舞台が、「鹿部のことだ」と町民が図書室のスタッフとの会話がきっかけで選書したそうで、そんなやり取りが私は好きです。実際に読んで訪問してみて、もしかしてここをモデルにしているのかな？とか想像できるのも旅の醍醐味。

そんなことを鹿部町から教えてもらいました。

夕方には中学生が公民館に集まり、図書室にもきて生徒が書架を整理しているようです。

北海道の地図を見ると、道南の JR 線は駒ヶ岳に沿うように内陸側と海側に線路が分かれています。札幌と函館を結ぶ特急などは内陸側を走るようで、海側は地元ローカル線で本数がとても少なく、私も滅多に乗車する機会がなかったので、帰りに JR 森町駅から特急に乗れるタイミングを掴めたのはとてもラッキーでした。右はまじかに内浦湾を、左に駒ヶ岳を望むという車窓はとても贅沢です。

JR 鹿部駅までは町営バスで図書室から行くことができました。昔ながらの素朴な駅。昭和を感じる駅。団体旅行者を見かけずのんびりできる町です。

2024 年5月訪問

加藤 重男